

眞生

第五卷 第二號

□私達はともすれば其の日其の日の生活に追いまわされて、永遠の理想を没却する時が度々である。乍然かうした人類の生活に果して何處に人生の樂みが見出せませう。

□尤も其の日其の日の生活さへ思ふに任せず、働かんとして働くことさへ出來ないで苦しんでゐる人もあるのに、永遠の理想だの價値の生活だのと云つたとて何にもならぬと云ふ人が無いとも限らぬ。

□乍然、友よ、私共の生活は眞に打明けたところ、ともすれば毎日毎日が其の日暮しの生活ではないか、そうしてそこには何等永生の光も輝かず又何等眞生の自覺も流れないで、何で眞の樂みが其の心底に湧くことがあらうぞ。

□我等は如何に考へても永遠の望みと喜びと力の生活ほど眞に自分に望ましいものとは無い。而てそれより外に人類の最高の幸福といふものがあらうか。否それこそ眞に人としての我等の幸福である。

□友よ、人はさう永くまで此の世に生きるものではない。而て一刻も早く此の人生の一生を達觀することが少くとも眞實の生命に生きるの第一歩でないか。

◇そこには永生の光を求め、そこには限りなき力と望みと喜びの天國に入るべき關門がある。死の門をくぐれ、死の門をくぐればそこに永生の光を見る。宗教の世界はそこから始まる。(念)

目次

◆喧嘩をやめて	尅子
◆宗教と生活	土屋 烈道
◆N 君	岩崎 親雄
◆憶念の記	佐藤 忠義
◆冬夜念佛	眞野 志岐雄
◆吾友だより	

▽一錢の錢は押入の隅にころがつてゐても一錢の錢がある。而しこれを費ふと幾通りにも使へる。買喰ひする。乞食にやるか、活動見にするか、汽車賃にするか、何にして一錢は一錢の働きのする、勿論二錢の役目は出来ぬが、一錢は一錢なりに立派な仕事をやる。△而し其場合、一錢が一錢なりで最善の働きをやつてゐるか否かが問題である。一錢に五十錢の代りをやれといふのはいない。一錢なりに最効用を發揮してゐるか、その場合一錢が向いて行ける方面は多々あるが、その中で至高最善の一点へ算してゐるか、此一つは直ちに其價値を決定するものである。△即ち此場合の相對價値は直ちに絶對價値を動かし統一價値を形成するものである。直實の用途に生きるか否かは、實に本體それ自身の生死に關する問題である。△すれば如何にして最善の道を發見し、その道と一になるか自分自身がその道の體驗者、その道自身とならねば自己はいつても、第二義第三義に墮在してゐる譯である。私といふ人間一匹、マツチ一本、飯一杯が如何にして最善に用立てるか、それが如來道である。△たつた一本のマツチとはいへ路傍に捨てられてゐるときはそこに殺されてゐるのである。そしてマツチ自身としては自殺してゐる譯である。他を殺し自を殺してゐるやせぬか、他を侮り、自を怠け、自を偽てゐるやせぬか、一錢銅貨が五錢顔をしたたり、一錢の力を出し惜みしてはゐるやせぬか。△力一杯、柄一杯、ギリ／＼一杯、勢一杯、天保錢は天保錢として通用して行く範圍内で最善に勉めてゐるか、此の自己提示、一杯主義が信仰であり、佛の望み玉ふみ心であり、佛自身で在らせられる。(尅)

喧嘩をやめて

□家では喧嘩をやつてゐる兄弟も、今自分達のお父さんの悪口でも云ふ者がある時は、もう喧嘩などは放て置いて其者の方へかかつてゆく。即ち私達億々の兄弟も、貪りの爲めに、瞋りの爲めに、又眞理に眼が眩んでゐるからお互に呑噬殺戮をやつてゐる、が今我々人間への共同の敵が現はれたら、直ちに小異を捨てて其敵に向はずには居れぬ、その人生への敵とは何か。

□お互が貪り位いの爲めに、又怒り位の爲めに喧嘩をやつてゐるのは、まだまだ餘裕があるからである、争ひで勝て貧れたとしても、勝た者まで乗せて人生そのものが將に覆へらんとしてゐる此事實に氣が附いて來たら、もうジとして居れぬ、取つたものも放り出して置いて、これはなんとせなきやならぬ。握てゐる者も死んで逝く、空手の者も死んでゆく、勝者も敗者も、強者も弱者も、皆な死んでゆく、これを念ふと我々が何の爲めに争てゐたか馬鹿馬鹿しくなる。

□人類全体が此の共同の敵——人生の價値如何といふ問題にぶち當つて、初めて掌上の争ひを忘れ大同に向はうとする、それが覺醒である。

□信仰とは依體の知れぬ佛とか云ふ怪物を脊負てゆく事では無い、此の人生の振抵からの醒め、人生そのものの建て更へを謂ふのである、眞の價値に生きる、價値とは何ぞや。

□その價値とは顯微鏡や望遠鏡で覗いて新しく發見せねばならんといふ原素でもない、吾人の胸底に既に横はつてゐる、動いてゐる、その生きたる「自己」である。

□その「自己」とは誰に聞かなくともいい、愚者は愚者なり、智者は智者なり直ちに自知せられ得る内底の佛である。そして其自己への還元、如來への歸趣、そして其自己者の軀起如來の發展が眞實の生活である。(尅子)

宗教と生活

土屋 觀 道

一
或る人々は念佛を以つて此の世に必要なものではないものであるかに云ふ人がある。乍然之等の人々は果して念佛が如何なるものであるかを充分に知つた上で、の言い草であらうか。

尤も世には一つの宗教さへ全々迷信であるといふ人さへもある世の中だもの、之等の人々に念佛が入れられやうわけもない。乍然已に一つの宗教を認め、そして又自分にも一つの自ら正しと信する一つの宗教を持ち得てゐる限り、此の正しき意味での念佛を否定すると云ふことは果して眞に生きやうとする人々にさう軽々しく出来ることではあるまい。

二

それに就て私の最不審に堪えないのは此の世に自ら相當の學識あり、見識ありと思つてゐる人々にして、今日の進んたる人類の宗教を何等學的研究も施さず、直に宗教を以て悉く迷信なりとして斷定するの輕卒である。

私ばかり人々に對して先づ尋ねたいことは諸君は如何なるものを宗教と思つてゐるかとの問題である。之に對して彼等は云ふかも知れぬ。それは神とか佛とかに對する世間の有神的态度である。乍然ど

こに神があり、佛があるか、未だ今日の所何一つとして神の實在、佛の發見が無いではないか、たまたま神あり、佛ありと云ふ人々の言行を見ればそれが何一つとして吾等の科學知識と合一したものはない。そしてそれから現はれて來る神佛への信仰は全く非科學的であり、而もそれより出て來る言行は最も底級な社會觀であり、道德觀に過ぎないではないか。而も今日の既成宗教の信者の態度を見よ、一として非社會的、非道德的生活でないものはない。まして今日の既成教壇にたつ多くの神官僧侶を見よ、神官を神職と區別して之を教導職としての神道教會の教師に見るも、又之を宗教々職にある寺院佛敎の僧侶に見るも、果して幾人か我々と共に眞に道を説くに足るものがあるか。彼等は既成教壇の保守者であり、又それによつて衣食してゐる不勞所得者に過ぎないではないか。否それどころではない、彼等は説く所多くは千年も二千年もの昔の事柄のみ多くして、寸毫も新しき現實の世界を知らない。而て人類の生活に不必要なる古き道德を強要して愚かなる民衆の良心を鈍らし、反て特權階級の利益を保護するにすぎないではないか。而てかゝるあさましき古き道德はかつて人類の向上をさへ妨ぐるものであつて決して吾々の默認することのできないものである。加之、更に恐る可きは何等罪なき多くの民衆をしてあはれにもそれらの中に潜在せる野蠻時代の迷信的信仰を、のかして之によつて自らの貪慾を充たさうとするの祚禱主義の災難よけの如きに至つては人類の幸福を妨げることの最も亦甚だしいものではないか。それなのに多くの人々が宗教だ宗教だとさわかまわるのは全く迷信にあらずして何ぞやである。私は時々かうした人々の宗教觀を耳にすることが無いではない。而て之等の人々は如何にも自分は一角の宗教に對する賢明な識者であり、又最も正確なる宗教的批評家であるさへ思つてゐる人がある。

乍然かゝる見方や批評を以つて眞に宗教を知り宗教を批評し得たと思つてゐる人があるならば世に之ほと愚かなる人々はない。何となれば凡そ神佛の存在は單なる科學的研究の對象として知り得べきものではない。而も彼等は神佛の有無を云ふ前に未だ神佛とは如何なるものを云ふのであるかと云ふことを知らないでいる而も獨斷的に自分勝手に神佛をかうしたものだと言つて之を否定しやうとするに至つては之ほと非科學的にして又非常識なものはない。それは恰も色盲の徒が自分に見えないと云ふ一理由のもとにそんな色はないものだと言つて断定するにも等しいものである。又酒の嫌いな人が酒の好きな人の甘いと云ふ甘い味を否定するやうなものではないか。私はかゝる人々には君は未だ眞實の宗教を知らないのだ君の云ふ神佛とは僕の意味する神佛とは全く其の意味が違つて居るではないかと云つて居るのである。神とは何ぞや佛とは何であるかと云ふ問題は正しい意味では宗教意識として現はれて來た時にのみ初めて眞の意味の神佛を知るのであるが若し一般的に云ふならば眞實の神佛とは自他一切の本源として主客未分の自我の本源たる宇宙の大生命とも云ふべきである。我等は宇宙の一員であり、宇宙は我等の本源である。従つて自己の精神も他人の精神も其の他一切の精神的物質的兩面をも包含した處の靈的宇宙の人格である。印度の古哲が我とは目で見ることとも耳で聞くことも手で觸れることもできるものではない、乍然目によつて見、耳によつて聞き、手によつて解りつあるものは我であると云つて居るが靜に考ゆれば實に我こそは夫である。而も其の我は單なる肉身の我ではない、靜に我そのものを直觀すれば我こそは實に何よりも確實なる一つの存在であるが乍然それが五感の對象としての存在物ではない。謂換れば眞實の自分は主觀の主体そのものであつて決して五感の對象としての存在物ではない。従て自己そ

のものの存在は五感の作用によつて知ることの出来るやうな存在ではないのである。乍然それだからと云つて自分が無いと云ふならばそれは反つて自らの不明を語るものではないか、而も今日の科學は主として五感の對象範圍の研究に過ぎないものでそれ以外の問題は科學研究の範圍に屬するものでない。従つて我そのものゝ存在の如きものを之によつてに證明することはできないものである。然ば此の宇宙はかゝる我の如き科學的には知ることのできない我そのものをも含んだものである限り、我等の生命の本源として、我そのものゝ根本たる如來の實在が科學的存在の範圍に入らないからと云つて、それが直に神佛の存在の否定とはならないではないか。そこには我をも他をも一切を包含した宇宙全一の生命である限り、如來は宇宙の大主觀である。即ち我々の如き小主觀の本源として我々の生命の本源である。従つて我そのものの存在が五感の對象としての存在の範圍を脱してゐるやうに神佛の存在も其の範圍を超越してゐるのであつて、只一概に神佛の存在を普通の事物の存在と同意義に取扱ふことはあまりに宗教に對す眞の態度を欠ぐものといはねばならぬ。

更に宗教信者の言行を以つて眞に非社會的世界觀であるとか、或は又あまりに非道德的生活であると云ふが如きは之またあまりに現代の宗教を解せない非常識の人々である。何となれば同じ宗教と云ふ中にも己に幾多の種類があることは一般の人々の知る所であり又同じ佛教と雖も今日の多くの既成佛教が必ずしも釋尊の説かれた眞實の宗教でもないことは少しく眞實の佛教を求むる人々には己に明了となつてゐるのであつて、寧ろ人として眞に生きんとする人々はどうしても眞の宗教に生きるより外に眞に生きべき道がないといふことが最も進んだ人々の叫びでないか。而も古き時代の宗教的世界觀が今日の科學的世界よりも劣つてゐると云ふ点で直に其の宗教の他の方面までも劣つてゐると云ふことはない。

之これを真にまじめに考究するならば今日の科學的世界觀が如何に變遷したからとてそれによつて現はされた各宗教的價値の世界觀までが劣つていゝるとは云へないのである。況んや今日の科學的世界觀が必ずしも其の究極のものでない限り、何も今日の科學的世界觀に今日の宗教が一致せなければならぬものとも云へない。否それどころではない、寧ろ今日の科學的世界觀に於ては我等人類の精神的活動の眞意義を發見することをもできず、又それによつて今日の我等の人格的世界觀の實在を寸毫も解決することのできない時代に於て、殊に我が宗教的世界觀が更に一層の我等の生活理想に一致するものがあるに於ておやである。加之、其の社會的道德觀に於ても全人類の幸福を中心としたる佛教道德の如き、人類の自覺を根本として日夜向上の一路に献身的生活に立つものあるに於てをやである、而も今日の宗教はしかく非社會的にして非道德的のものではない。否我々の宗教は寧ろ今日の最高道德と云へる一般倫理學のそれすらあきたらず、更らに進んで全人類の幸福に全力を注ぐものあるに於てをやである。而も彼等の云ふ所謂宗教なるものは我等の古き宗教として己に顧みないものについての宗教に對してはあつて、それが必ずしも我々の宗教でない。従つて彼等の難する宗教は我等から云へば眞の宗教ではないのである。しかのみならず彼等は未だ眞の宗教の何者たるかさへ知らないでいる。

友よ、若し諸君にして眞に宗教を知らんと欲せば今少しく見聞を廣くして我等の眞門に來られよ。宇宙の本源たる永遠の生命に生き、日夜に進んで止まない人生の幸福に向つて眞に生きやうと思ふ人々よ我等は如何にして此の眞生を完ふすべきかを眞に求むべきものではないか。

そこには如來への合掌を於いて眞に生く可き方法はない。合掌とは即ち念佛のことである。宇宙の本源たる宇宙の眞理たる佛の心に生きすして、どうして眞實に生きられやう。佛に生きるとは眞に生きる事である。如來を難れて眞は無く、神を離れて自己はない。念佛は即ち眞に生きるの姿であり、如來に生きるの合掌である。(一五、二、一〇)。

N 君

岩 崎 親 雄

N君は私の友人であり、而かも同じ店に勤めてゐる最も親しい間柄の友人である。

君は社會主義學說の共鳴者である、而り熱心なる共鳴者である。これがために社會主義といふ名だけ聞いて一種の恐怖を感じる人達から往々誤解を受けてゐる。然し私は常に君の美点を看で、どうもすれば概念的佛教に捉はれやうとする低級なる信仰に比べて寧ろN君の方が「宗教人だ」とさへ考へることが屢々なのである。でどうか折があつたら十屋上人のお話を聴かしたい、聞いて貰ひたいと念願して來たのであつたが不幸今日迄その機會を恵まれなかつたのであつた。ところがこうして上人の御來飯を得たので今度こそ對談させたいと思つて君を誘ひ出し遂に今夜その望みを遂げたのであつた。今朝もN君にいつた通り私は私自身の

救済を確信せるが故にN君の救済をも大ミオや様に只管祈願する次第でN君を法苑に誘ふことが友達——最も親交ある友人に對する極めて尊き仕事であり、無上の意義ある事業だと深く感じてゐるのである。今同君と分袂して歸宅の上日記を書いたから道友諸君にも私の悦びを頌ちたいと思つて特に左にその全文を載せることにした。

大正十五年一月十七日——朝N君を誘ひ出すべく大元氣で出掛ける、山阪神社神苑で直ぐ宅が解つた、尤もN君(讀者に申すN君夫婦最愛の一子で今年七歳、宅に在る時は胸に無産階級の徽章をつけてゐる小さなエスベランティストである)に途中で出會つて案内をして貰つた。

來意を述べてN君から快諾を受けた時には既に我事成れりと全くホツトした。寺へ來さへすれば

もう占めた。今迄來さすのに骨折れたが義理でも
いい來ると極まればもう此方のものだ。兎に角私
は客引の使命を果たしたやうなもので後は宿屋の
亭主たる上人の客扱ひ一つで長滞留もするだらう
し、又お茶だけ飲むで茶代も置かずに直ぐに出立
するかも知れぬ、がほんどにホットした、同時に
衷ちからの悦びをも禁じ得なかつたのである。

N 君親子と恵比須町で一先づ別れ私だけ貞松院
に往つて念念佛をする。

畫の上人の御講演は「婚因の意義」といふ題で
婦人修養の最も重要な点であり、それと共に私
共男子といへども聞流すことの出來ぬ活教訓であ
つた。私達の如き夫婦何れもが眞の「婚因の意義」
を辯へずして無自覺のままに既に結婚をし子供
二人も三人も出來て了つたといふことは實際取り
還しのつかぬ二人の——否子供等に至るまでの眞
實の不幸と謂ひ得やう、然し今更どうしやうもな
い、すべてが結婚前の昔に還ることの出來ぬ以上
はせめてこの後なりとも誠の夫婦の道を踏むこと
に精進して行きたいものだと思ふ、そし

て遠からず眞實に二人が根本的自覺の上に理解し
合つて更に意義ある結婚式を擧げて心から法悦に
満たされた光明生活に入らうと心底深く決すると
ころがあつた。

夜——N 君も來會、座談會を開いて貰ひ上人の
雄辯にスツカリ酔はされて了つた。

上人とN 君との間にも二三の問答があつてN 君
もとうやら吾々の宗教運動、即ち眞生運動に對し
て全部の肯定はしないまでも全然否定の出來得な
い正しさを感じて來た態度であつたやうに見受け
られた。實は同君のために夜を徹しても語り合つ
ていたゞき最後の「止め」を刺す迄に進みたかつ
たのであるが残念ながら時間が許さなかつたので
其意を果たさなかつた、けれども在來の佛教に對
するこつした人達の共通的に有つところの反感乃
至蔑視といふべきものが上人の懇切なる熱辯力説
によりて少なくとも吾々の信する宗教に對してのみ
は漸く誤解が解けて往つたやうに見えたのは強ち
私の我田引水でもないと思ふ。

N 君は歸途電車の中で、「結局價值ある人格に

生きたること、不斷に眞剣な態度に在るといふこと
は同感だが——永遠の生命は價值ある人格に生き
ることによりて勿論同時に得らるることであるが

——その方法に至つて念佛が最善最高のものでは
あると斷せらるゝ点から離れて往く、私としては
「社會改造の實行に着手することが當然であるま
いかと思ふ」といふ意味で話して居たので私は
「その君の言ふ社會改造の實行に取かかるには一
体何を目標とし何を根底とするのか？ 實は此一
点を先づハッキリとして置くための最始の方法が
念佛であつて、この標準がハッキリしてゐる社
會改造の實行ならばその當体こそ私共は念佛精進
と見てゐるのである。然し、果してすべての人々
が眞にこの大宇宙の絶對的理想を中心としないい
も直ちに正しき意味の社會運動が出來るかどうか
たとへ出來るとしてもそれが眞實の善化運動であ
り、美化運動であるかどうかは頗る疑はしいもの
である、そこに先づ念佛の必要があり、合掌の世
界を根底とせなければならぬと斷する譯である、
即ち眞實の宇宙生命に即したる社會主義のみが正

しき社會主義であり、同時に眞に人類の進歩發達
に貢献するものといひ得るのであらうと思ふ」と
述べかへしておいた。

尤もN 君は「既に意義ある人生觀を抱き價值あ
る生活を眞剣に營まんとするに當つて殊更に宗教
を必要とせない、それが藝術にあれ、政治にあれ
教育にあれ、敢て問ふところでないが、しかし私
の信じるところでは滔々たる現代の思潮となつて
ゐるものは社會主義的思想であるが如何にと」語
つてゐたが、これは無論私も同感で今後の宗教は
是非社會主義を多分に取入れたものでなければな
らぬと信じてゐる一人である、然しなから社會主
義の上に宗教が在る譯ではなくて實は宗教の中に
社會主義的色彩が加味されて往く譯である。實の
ところ吾々も宗教とか念佛とかいふ言葉に兎角捉
へらるゝ傾向があり、他も亦この言葉の上の概念
が先入主となつて誤つた批判を下さうとする態度
が見えるのは、かへすゝも残念なことである。

吾々はどこまでも佛おかい世界を至高の理想境とし、この理想實現の方法に先づ念佛を根本義とし

て選んでゐるやうな次第である。

何れ機を見て有志の人達だけでも亦寄つて貰つて君中心に眞實の人生觀をもつと深刻に談じ合つて是非私共同盟の有力なる盟友の一人となつて

頂かねばならぬと心密かに期すところが有り、家路に急ぐ君の後姿に對し謹んで合掌を久しうしたのであつた。

(この稿翌日の午前四時に擱筆せり)

憶念の記

佐藤忠義

◇終りなく、また初めなき無量壽にいま現身の今日ぞたのしき。

◇大自然を觀じて、あゝ美なる哉と感ず心は、信仰(宇宙的意識?)への第一歩である。

◇常に大自然を想ひ、常に眞理を觀ず。眞理の動くところ一切は愛(大慈悲)なり。

大自然の叫聲を聴く、一切が圓滿完成へ進行せむとする叫びである。一切が生きなんとして、眞に生きなんとして、意識的に無意識に蠢動せる姿である。

◇退化も劣敗も、更によりよき未來への前程であると思ふ。罪、闇、惱も光明への前程だ。

◇一切が光つて居る、一切が尊い。

◇華嚴經要義を讀む、維摩經を讀む、經文は一つの新しき言葉となつて聽えて來る、其れは大自然の聲と同じものである。

◇道友の姿が善財童子の子のやうに見へる、私も善財童子だ。念佛の船は走る善賢の行願へ。

◇今日まで讀んだ經典では、無量壽經に於て佛の大慈悲心の溢れきつたのを觀する。「子等よ我と共に歌はむ」と親子の合唱が阿彌陀經だ。

◇如來に絶るとも、人に絶るな。

◇如來に歸命してこそ、自己を信ずることが出来る。

◇炭よ火となつたか、燃えよ燃えよ全分をつくして私も燃えあがりますやうに、全分を發揮して燃えあがりますやうに。……南無

◇育てることは尊い、鶏が雛を抱く姿、小、犬に

乳を與へる母犬、犢を舐めまはして居る牝牛の姿、こまかき心づかいで嬰兒を育てゆく慈母の愛は言はずもがな、農夫が畑の作物を育て、居る姿にも尊いものがある。

◇一切を育てます、如來の相好を人間的に求むる

とき、觀世音菩薩の大慈大悲のみ姿に到達する世間よ笑ふな、若者が念佛三昧に耽つて居る姿を、消極的なり、無爲なり、懶惰なりとして、卑しむるなかれ、斯如靜寂の中には無限の働がこもつて居る、全生命は發進して邁進して居るのだぞ。

◇性格に缺点があつても、佛性を育て、精進して

居る人が一番このましい。

◇或る男が云ふ、私は功利主義の國、相對主義の國、ボンチウイズムの國に、求め求めて來ましたが私を満足させる何物もなかつたです、此等の國は苦と惱の國です。今や眞生の國に救はれました、歡喜飛躍します。私は遂に助けられた。斯の理想郷を窮みなく莊嚴させてもらうのだ。彼れは汗水を流して、働きたした、彼れの頭には圓光が輝いて居る。

◇あ、時は過ぎ行く、流水の如くに。水仙の花が咲いた。鐘が鳴る、人が死んで行く……一切が如來のなかに。——一五、二、二五——

詩

冬夜念佛

眞野志岐雄

木魚叩いてひたすらに、

ああ念佛する夜には、
魂は永遠の昔にかへり
ただ感謝の涙に濡るる。

法悅の泉は滾々と溢ふれ

泪はさん／＼と悪醜を洗ふ。
悔ひの泪の洗禮に
ひたる夜こそうれしけれ。

木魚の音は瑠々と響き
稱名の聲は清々淨々とゆく
—
あありかたや

光明遍照十方界
うれしや

念佛衆生攝取不捨

醜きが故に、淺ましきか故に、
光の世界をねかうが故に

南無阿彌陀佛、阿彌陀佛。

冬夜の村は、水の如き月光の
さん／＼と音なく降り

ここ佐屋川廣川の村中に

ただ木魚の音の聖く淨くと鳴る。

木魚叩いてひたすらに

ただひたすらに念佛する夜には
ああ魂は永遠の昔の清淨にかへり
ただ望みと悦びの泪にむせむか
ユダの魂を持つ私さへ

提婆である私さへ

阿闍世たるの私さへ

ああ環境に悪化された私にも

奥を叩けば、大宇宙の慈悲はあつたのか。

有かたや、うれしや

生きとし苦しむことのうれしや。

重き罪を許し給へと願うか

有りかたや、うれしや

三身即一の大みをやを知れば——。

散文詩

信仰 悲 鳴

なまじつか、宇宙の眞理を知つたことを

悔やんだ時もありました。

無意識でゐた時代よりも、信仰を得た時になつて、却つて荷が重くなつた様に、

思つて苦るしんだ時もありました。

「信仰を得たならば——。」

周囲は却つて前より迫害の度を加へた様に思はれて——。

キリストを十字架につけた、ユダヤ人の心を知つた時には、却つて信仰を得た悲鳴をあげずにはゐられませんでした。

却つて荷が重くなつた様にさへ思はれ——。

而し苦るしんで行くことはいいことだと思ひます。

自分は自分の力の及ぶ限り

さうだ空く力の限り生きて行けばいいのだとも思ひます。

私の心の中にはユダとキリストとか住んでゐるので困ります。

或る刹那には、聖いキリストであり乍ら、怒りの刹那にはユダです。

今にユダを放逐し度いと思ひますが却々自分の心の中のことが、容易のことでは出来ません。

泪のお飯を頂いて、さて机に向つた時には、泌々とエトランゼエの自分が哀しまれます。

而し、時の流れに従つて、解脱の黎明が近づきつつある様に思はれます。

魂と魂の融け合ふ理想境の實現は何時であらうか。

人間は何時まで憎み合ひ、呪ひ合ひ、殺し合つて行かなければならぬのでせう。

而し、例へ自分に大きな仕事が出来なくとも、一人がよくなることは、一人がわるくなること

より社會に及ばず善惡二つの差違を考へて、よいことだと考へます。

十二月號眞生に一茶の句が出てゐましたが、人間苦をなめた、民衆詩人一茶の晩年をこの頃研究し乍ら、私は彼の晩年の態度に泪じみます。晩年に嫁いた妻女に、四人の子に、皆先立たれたら、奥信濃の柏原の小庵に、

とも角もあなた委せの年の暮

と歌つた彼を――。

一唯だ自力他力なんのかの云ふ、あくたもくたを、さらりと、ちくらが沖へ流して、さて後生の一大は其の身を如來のお前に投げ出して地獄なりと極樂なりとも、あなた様のおはからひ次第遊ばされ下さりませと御頼み申すばかりなり。

かくの如く決定の上には南無阿彌陀佛といふ口の下より慾の綱をはるの、野に午長鯉の行ひして人の目をかすめ、世渡る雁のかりそめにも、わが田へ水を引く盗み心をゆめく持つべからず。

然に時は、あながち作り聲して念佛申すに及ばず。願はずとも佛は守り給ふべし、是れ即ち當流に安心とは申すなり。穴かしく

ともかもあなたまかせの年の暮

雪深い草庵に獨居して、日の光を受け乍らしみく、とこの境地に來た時に、彼の苦しみの老一茶もほんたうに落ちついたらうと思ひます。

われと來てあそべや親のない雀

故郷やよるもさはるも茨の花

五十年踊る夜もなく過ぎにけり

その彼も初めて、雪の下から葉ぐむ麥を眺めたら兎も角もあなたまかせの年の暮と、つくづく宇宙の大慈悲にひたつた時は、はじめて法悦の落着きにひたつたと思ひます。

繼母への憎み、異母弟への憎み、故郷の人々への呪ひ、五十年を殆んど憎みの中に救はれようとして呻めいて來た彼も、初めてこゝに泪して如來の前に 伏したのです。

彼のその時の境地を尊く、有りがたく、哀しく而して涙ぐましく思ひます。

春立や先人間の五十年

おのれやれ五十の花の春

五十年あるも不思議を花の春

露の世は露の世ながらさりながら

名月や膳へ這ひ寄る子があらば

もう一度さめて目を明け雜煮膳

彼は五十となつて始めて人生の味をしみくど

味つたのです。

小言言ふ相手もあらば今日の月

――亡妻を偲び――

かたみ子や母が來るとて手をたたく

――亡妻新盆――

家が類焼した時にさへ、

盤火もあませばいやはやはははや

而して臨終を前にしては

入らば今日草葉のかげぞ花に花

是がまあ終の極か雪五尺

苦しむ抜いた彼も、絶對他力の清淨境に達して、雪五尺の草庵の中に落ちついた心で生の有

難さを味はつたのです。

自力で行つた、俳聖芭蕉人の死には、一種悲痛が伴ひます。

旅に病みて夢は枯野をかけめぐる。

多くの弟子達に附添はれ乍ら、贅澤な床に死ん

つた芭蕉よりも、汚い草庵に、僅かな人々に看

護られ乍ら死んで行つた一茶の方に、或る落ち

着きと、よろこびとを見出します。

ここで芭蕉と一茶を論じてゐる譯ではありませぬ。

私は一茶の遺文を取り出して見て、泌々と自分に當て飲めて考へさせられたのです。

或る刹那には、地獄を願ふ自分です。

聖典と稱名をふみにじるユダです。

四時の苛責に轉轍する畜生道の提婆です。

今は私の心もしゆんれつな冬です。

灰空です
凧です。

枯草です。

叩かれて、殺された、冬の暴力と迫害に醜く、

歪んでゐる煩惱地獄です。

而し、やがて春が来るでせう。

言行一致の至境が――。

鳥が花にたはむれる春が、

あの春がやがて私達の上にも来るでせう。
宇宙の大慈悲は、灰色の冬空の上に、麗ら、か
な春光を、燦かして呉れると思ひます。

沈鬱した思想も、晴天になると思ひます。

(悲しみあるものは幸ひなり。)

の句を麥の芽ぐみを見乍ら、泌々と味つてゐます。

一九二五、一一、二七夜

吾朋便り

oooooooooooooooooooo

◇東京 土屋觀道より

静に思へばもう正月も過ぎました。何と云ふ一月の速いこととせう。それについても私の心は皆様に對してすまぬ心もいたします。すまぬ心とは私の學寮の建築の爲めにほんとうに心にもない御無沙汰を自然にやつて來たことであります。到る處に手紙をいたしても殆んど打絶えて御返事もせずしてまた是非にも立寄りねばならない道友の

所に全く途絶えておよりもしないことはおわび仕やうもありません。乍然私の親愛なる道友の諸兄よ私の至らぬ處のすべてを許して今までも勝つて倍舊の親しみを私の爲めに垂れて下さい。

私の本心は今や心から活動の中心に全力を注いでゐるのであります。従つて私の昨今は一面學寮の建築で寸刻の餘裕もない有様であります。それは偏へに全く眞生への活動の準備であります。

従つて私の昨今は勉學と傳道と念佛の生活を外にして眞に生ぐべき道とでもないのであります。殊に今春以來各地に於ける道友の眞生同盟に對す

る眞實の活動は私の衷心より感謝して止まない所でありませう。願くは之を活動の中心としてし全人類の幸福に向つて眞實の生活に立ちませう。

□北越の友より

南無阿彌陀佛

今 井 善 吉

如來茲光裡に毎日喜びの發奮向上の日を送らせて戴きます。

信仰は我々の生活であり念佛内の生活、事業であること云ふ事は近頃益々自信を得て參りました。念佛を離れて何者もないと明になつて來ました。念

佛上人様近頃如何御消光遊ばしますか。私の家では私の母が信仰に入らうと一生懸命に御念佛を唱えられる様になりました。

今月は近處に御別時はないでせうか。御正月の閑散を利用して親子して出掛けたいと存じます。

眞生誌代同封致しましたから御受納下さい皆様に宜敷しく 左様なら。

南無阿彌陀佛

御上人様

□南無阿彌陀佛

非常に、御寒い今日此頃、御上人様には御機嫌よく、我々人類向上の爲、御活動の事を御喜び申し上げます。お正月、清水の御別時ではいろ／＼と教導下さいまして我等夫妻初め店員皆々非常な喜びであります。殊に店員が心機一轉、歡喜の内に意義ある一日／＼を送りつつある事を見ては何とも云への感に打たれます。

十七日御上人西下の途中御立寄り下さると小島君よりの報告に一同の喜びは申し様もありません、各自出張を繰變へて店員全部揃つて御待ちしてありますから是非、御立寄り御教導下さいませ様特に御願申上げます。我等三名(店員一名)も本日夜行で岐阜愛知縣下へ出張致しますが十三日には歸店しまして御上人を御待申して居ります今からお喜びを思ひつゝ暮して居ります、では、どうぞ是非御立寄り下さいませ様に重ねて御願申上げます。失禮致しました合掌

沼津市

辻 義

◇清水のお別時に又名古屋の例會に無上の御法施有難存じます。拜眉するごとに我ながら力の加はる思ひが致します。お別れすると一寸力のぬけた様な氣が致します、斯んなことではいかぬがと思ひながらも。其節はお風邪の氣味に思へましたがお變りは御座いせんか、御自愛を切に念じあげます私もこの自信もて大いに働かせて頂こうと思ひます、——因縁により人生の意義に覺めて以來僅かに一ヶ年未滿、變りはてたる我が心よ、人の心は

◇今度清水では一つの別荘が眞生運動の爲めに寄贈せられました。道友と共に永劫の記念として御殿場にも移して全國的修養の根本中堂にも仕たいものです。東京では之の爲めに亦金五百圓也を寄贈した同志があります。又清水にも今度愈眞生同盟が生れました。道友の熱烈なる正に衝天の勢いだとの報せであります。願くは此の勢いで全國にも此の同盟を結ばうてはありませんか。道友の諸兄に哀心より念願します。(觀道)

斯くも變るものか、新年よりありのまゝの感想を記さむとて、ノートを作りました、日々に手帖は黒くなつて行きます、これもよい一里塚だと思ひます、其の内的一部分を別紙に記しました、御電覽を賜れば幸甚です、まづは御氣嫌御伺ひまでに申上度。

南無阿彌陀佛合掌

二月五日

佐屋村 佐藤忠義

土屋上人 座下

定價一部十錢 半年六十錢 一年一圓

振替口座東京四七二八八番 眞生社

東京市芝區芝公園第十四號地九番

發行所 眞 生 社

東京市芝區芝公園第十四號地九番

編輯兼 土 屋 觀 道

發行人

東京市芝區三田四國町二番地三號

印刷人 三 井 清 次

東京市芝區三田四國町二番地三號

印刷所 精進堂印刷所

(大正十四年八月十三日)

大正十五年二月十一日印刷納本

(毎月、毎月廿七頁發行第五、第二號)